

ざいちのち 63

まちやむら，そこに住む人びと（＝ざいち）の，
知恵や生き方（＝ち）から学び，実践する活動です。



亀岡フィールドステーション

12 連筏の復活に向けて (2)

大阪商業大学経済学部 原田禎夫

長尾山山中での伐採と葉枯らし乾燥を終えた木は、筏流しを目前に控えた1月に山中から搬出された。この作業も、地元の篠町まちづくり推進会の市民ボランティアと京都府立林業大学校の学生の手で行われたのだが、市への売却後、荒れ放題だった山が年々よみがえり、市民の憩いの場としての賑わいが生まれている中で、筏復活プロジェクトに材木が使われることは、ボランティアの退職世代の市民にとっても大きな喜びとなったようである。

たとえば、市民ボランティアの一人の facebook ページにも「皮を剥いだ杉、ヒノキの表面はなんとみずみずしく、きれいなこと！ 初めてのいい経験をさせてもらいました。」「いろいろな方の『力』の結集、保津川筏復活いいですね！」「保津川筏復活に色々なパーツの方が出来る範囲で取り組んでおられ、絆を感じます。」といったコメントが相次いだ。ちょうどこの時期は、台風18号による大きな被害があり、保津川下りの運休が続いていた時期でもあり、人々の中で「川を通じた山とまちのつながり」を改めて確認する機会にもなったのではないだろうか。

さて、山中での伝統的な葉枯らしの結果は、現在、京都府立林業大学校にて分析されているところであるが、我々が学んだもうひとつのことは、伐採や乾燥、搬出、筏流しという伝統的な技法の一連のプロセスが、見事に自然のサイクルと調和しているということであった。

たとえば、今回は葉枯らしのために皮を剥ぐことに少し苦勞した。後で志方隆司林業大学校教授から教えていただいたのだが、作業を行った9月末は、タイミングとしてはぎりぎりのものであったそうである。皮剥ぎは樹木が勢いよく水を吸い上げている6月から9月上旬に実施する方が皮を剥ぎやすく、蒸散作用も大きいため、より作業効率が高いそうである。また、山からの搬出や筏流しは冬場の作

業であった。当初、2月9日に予定していた筏流しは大雪に見舞われ、我々の経験不足もあって安全を優先して翌週に延期したが、特に重い松の木などは、あえて積雪を利用して滑らせて搬出していたそうである。また、筏流しそのものも、水田に水を使わず、一方で雪解け水などにより一定の水量のある冬場が適していた。

このように、我々にとっても自然のサイクルに合わせた日本古来の技術を実感をもって見直す良い機会となった。



写真1：山中からの搬出作業のようす。篠町まちづくり推進会のボランティアスタッフと、京都府立林業大学校生の共同作業で実施された。(写真提供 軽野 保氏)



写真2：山中から搬出されて積み上げられた材木。反りや割れはほとんど見られず、葉枯らし乾燥の有用性を確認できた。(写真提供 河原林 洋氏)

神社の立地を読み解いてみる

—平らな守山市の神社の場合—

守山 FS 研究員 嶋田奈穂子

あまりにも当たり前のように風景に溶け込んでいるので、例えば守山市を車で走っていても、普段は気にもとめない。でも、海外からのお客さまを乗せていると、尋ねられることがある。「あの森は、なに？」と。それは、平野部の田んぼの真ん中に浮かぶ島のように見える鎮守の森、つまり神社である。



写真1：守山市浮気 住吉神社の神殿後方に残る、土塁

滋賀県守山市は滋賀県で最も長い流長を持つ野洲川の河口（デルタ）に位置しており、市内の高低差が22m未満という平坦な土地である。特に目立った土地の起伏もない地域であるが、注意深く神社の立地をみると、なんとバラエティ豊かな形状かと驚いてしまう。

例えば、守山市服部の稲荷神社は、野洲川旧北流の堤防跡にある小山に鎮座している^[1]。この辺りは、明治29年に野洲川が決壊したとき、多くの土砂が田んぼに流入し、めちゃくちゃになってしまったところを、明治39年に行われた耕地整理で復旧した土地である。その整理の際、田んぼから除かれた土砂は野洲川の堤防に積み上げられた。そのときできた小山に、人々は稲荷神を祀り、野洲川の息災と耕作の安泰を願ったのである。もうひとつ、同市浮気の住吉神社をみてみよう。今では住宅の一角にたたずむ境内だが、神殿の後ろを見てみると、その神殿を守るように高さ3mほどの土塁がのびている。これは野洲川決壊による洪水から神社と集落を守るために

築かれた堤防である。つまり、浮気は輪中集落を形成していたのである。道路の新設などにより、土塁は神社境内に部分的にしか残っていない。

このように、地域の自然環境とそこに暮らす人びとが、長い歴史のなかでどのようにやりとりしてきたのか、その痕を眺めることができるのが、神社の立地である。こんなに平坦な守山市の中を見てみても、神社立地はそれぞれの特徴をもっていて、集落の物語が潜んでいる。山間部、海岸部、島、都市…日本には、いたるところに神社がある。みなさんの地域にたたずむ神社はどうでしょう？その立地には、どんな物語が刻まれているのでしょうか？この面白さに惹かれて、私は神社立地を研究しています。



写真2：守山市服部の稲荷神社



写真3：野洲川デルタの鎮守の森

注釈

[1]野洲川はもともと、河口が南北2つの流れに分かれていたが廃止され、その真ん中に放水路が造られた。昭和54年に放水路にはじめて水が流され、全ての工事が完了したのは平成16年である。

中山間地に必要なこと、山間振興奨学金と小水力発電+電気自動車

朽木FS 黒田末寿

中山間地の困難な問題：教育

中山間地ではかつてさかんだった薪炭生産や林業が衰退し、若い人が仕事を求めて出ていき、高齢化が急速に進んでいる。こういう地域の高齢者は80歳すぎまで元気に働いているが、山林の手入れや集落から離れた傾斜地の田畑は放棄せざるを得ない。そこへシカやイノシシが進出して荒らす。そのようにして人間の生活圏は狭まり、中山間地は全体として放棄されつつあるのが現状である。

もちろん、残った人たちは頑張っているが、若者がもどって来ない限り生活を維持することが困難になりつつある。そこで現代の若者たちに、山の暮らしがいかに魅力的かを実践的に示そうというのが、今北哲也研究員が提唱する「くらしの森」構想である。今回は、それにいくつかの書き足しをしたい。

長期的に衰退している中山間地が、急速に衰退する要因として小学校の廃校がある。親は子どもを隣の小学校まで送り迎えすることになって、これもたいへんだが、小学校があっても高校、大学に行くには、下宿代と学費を合わせて現金が必要になる。Iターンでやって来た両親は山里のエコな暮らしに満足していても、それでは学費が稼げないので町に出ざるを得なくなる。

山里では現金がそうなくても豊かに暮らせる。だが、教育(と、もうひとつ、病気治療)でどうしても現金が必要になると、若い夫婦はやはり町に出なければいけなくなる。だから、<若者と子どもたちが安心して住めるよう>、だれもがこれらの必要費用を稼げる仕事を山里に作り出すか、それとも、子どもを安心して町に送り出せる奨学金(「山間振興支援奨学金」)をつくるか、どちらかが中山間地の持続には必須である。そしてできるだけ山里の学校と診療所を維持・確保することだ。

よく「過疎地の高齢者が安心して住める環境づくり」といったことが言われるが、地域社会を持続させていくには、「若者と子どもたちが安心して住める環境づくり」がそれ以上に重要になってくる。

中山間地で小水力発電を！

もう一つ、給油所の存続という問題がある。もはや中山間地では車がないと移動や物の運搬が保障されないからこの



写真：カナダ製の小型水車・発電機。20万円。2本のパイプで水を噴射して発電する。水を引く落差は10m以上が望ましい。1.5kWまでの発電力をもつ。

家にも車があり、農家はほとんどすべてが軽トラックと乗用車もっている。ところが、給油所は過疎地から減る一方である。今は、農業車両も化石燃料なしでは動かない。過疎化だけでなく、円安による燃料高騰のおりから多くの人が通勤や買い出しのついでに町で少しでも安く給油してくれるので、ますます給油所が成り立たなくなっている。

給油所がなく燃料を買うためだけに車を往復2、30kmも走らせるようなところでは、かろうじて農業を続けている高齢者が少し元気をなくすと耕作放棄につながるだろうし、運転が出来なくなった高齢者は暖房燃料に困る。このような事情もあって、多くの人が中山間地にこそ電気自動車(EV)が必要と言っている。

電気自動車は、今の給電システムで移動エネルギーを確保できるだけでなく、現時点ではガソリン車に比べ燃料費が圧倒的に安い。もし、自分たちで安く発電設備をつくれ、EVに充電できればいいことはない。滋賀県姉川上流域8集落では、軽トラックは20km/日ほど走る。それに通勤乗用車を合わせて、EVが1戸あたり40～50km走る電力があればよい。EVが10.5kWhで110km走るとされているので、暖房などでその60%しか走らないとしても、6.4～8.0kWhの電力量があればよい。これは、330Wほどの発電機が1日で生み出す電力量で、1kWだと3軒分供給できる。

多くの中山間地には、数kW～50kW級の小水力発電の適地は多くあり、普通の家庭では、家電とEVの電気エネルギーは1.5kWの発電力で間に合う。海外には安くて定評がある小型水車・発電機があり、工事を自分たちでやれば十分採算がとれる。さらに、この電力で稼ぎを生み出す工夫が出来ればなおよい。エネルギーの自立は共同体の自助と工夫によって可能になる。

催しのご案内

■ 京大生生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所
京滋 FS 事業 第 62 回 実践型地域研究 定例研究会
日時 2014 年 1 月 31 日 (金) 17:00 ~ 19:00
場所 京都大学東南アジア研究所 稲盛記念館 2 階東南亭
CSEAS Tonantei, 2nd Floor of Inamori Memorial Building
内容 タイトル: ミャンマーの Wa Pawn (竹の筏) と Tit Pawn (木の筏)

Title: Wa Pawn (Bamboo raft) and Tit Pawan (Wood raft) in Myanmar
発表者: 大西信弘 (京都学園大学・亀岡フィールドステーション)
Presented by Dr.Nobuhiro Ohnishi (Kyoto Gakuen Univ., Kameoka Field Station)
★以上の催し物への参加ご希望の方は、下記までご連絡ください。
京都大学 東南アジア研究所 実践型地域研究推進室
担当: 安藤和雄 (ando@cseas.kyoto-u.ac.jp) まで。

ハジャットブミ儀礼

総合地球環境学研究所 アミ・アミナ・ムティア

ハジャットブミ儀礼は昔からの農民文化です。ハジャットブミ儀礼またはルワットブミとスダ人に呼ばれ、西ジャワのいくつかの場所で行われています。ハジャットブミ儀礼は田植えの前に行われます。儀礼では、神様に沢山の収穫が得ることができるようお願いします。

ハジャットブミ儀礼は、稲作農民にとって一番大きなお祭りです。他にも、苗床づくりや田起しの前に、マパグチチャイ儀礼を行います。また、田植え前にはミテンバン儀礼があります。ストップクン儀礼は、稲の収穫後に米を保存する場所(ゴア [goah])に最初に入れる儀礼で、ウガニヤラン儀礼は、ゴアから新米を出すときに行います。それぞれの儀礼ごとにお祈りの言葉が異なります。

ハジャットブミ儀礼は、段取りを立てる(ダダフット)段階からお祭りの終了まで一ヶ月ぐらいかかります。始める前の日の夜にグムユン・ブフンと呼ばれる演劇を行います。次の日に稲刈りを行い、生贄の水牛の頭を供えるヌンバルの儀礼を行い、共食儀礼(スラムタン)を行います。これらは決められた衣装を着て行います。

普通、この儀礼は、村の中央の交差点で行われます。そこは、色々な方向から人が来ることができる打ち合わせ場所です。そして村の長老がお祈りを捧げます。その後ライオンの形の人形を神輿として村を回ります。特定の場所に止まって村人が用意した食べ物を取って用意された籠に入れます。食べ物はいろいろで、ナシトゥンパン(山の形をした黄色いご飯)、丸ごとローストチキン、ジャジャンパサル(伝統的な駄菓子)やその時の果物などです。その後人形芝居であるワヤングレクを見ながら、皆が集めた食べ物を一緒に食べます。

この文化はスダ人の哲学に従って行います。スダ人の哲学は相互扶助サビルルンアン(スダ語:Sabilulungan、インドネシア語ではゴトンロヨン [gotong royong])や必要のある方への助け合いヌルン・カ・ヌ・ブトゥ(nulung ka

nu butuh)、困った人を助けるナラン・カ・ヌ・スサ(スダ語:nalang ka nu susah、インドネシア語ではサリンメンバントウ [saling membantu])です。

今のハジャットブミ儀礼は昔のハジャットブミ儀礼の復活です。住民たちはハジャットブミ儀礼をやりたいのですが、イスラム教のウラマ(ulama)はこの以前からの式だけではアニミズムとして許そうとしません。そこで、住民は、ハジャットブミ儀礼に際し、イスラム教のお祈りを組み合わせ、先祖への感謝だけではなくアッラーにもお祈りをします。ですので、今のハジャットブミ儀礼は、スダ人の儀礼とイスラムの儀礼の混合です。それまでのスダ人の文化も、仏教とヒンドゥー教の要素が濃厚です。これらの混合したお祈りは、線香を使っています。

環境保存の観点からみると、この儀礼は、生物多様性を保全する方法の一つです。稲は単なる食べ物ではなく、神々デワデウィ(Dewa-dewi)の活動の結果であるのでとても大切な物です。これから、色々な稲の在来種も保存されています。保存されている在来種には、グリスマンデイ(geulismandi)、パレヒデユン(pare hideung)、ロゴル(rogol)、サリクニン(sarikuning)、マラーマイ(marahmay)、ケタンボダス(ketan bodas)、ケタンヒデユン(ketan hideung)などがあります。



写真: ハジャットブミ儀礼のお供え物を準備